

博士学位論文要約

論文題目： マイモニデスにおける神への道程
—神を知解することと人間の生き方との相関性に関する考察—
氏名： 神田 愛子

要約：

1. 執筆動機あるいは執筆に至った経緯

マイモニデスを研究するに至ったのは、2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ事件が端緒となっている。当時、私はカルトがかったキリスト教会を脱会し、ようやく落ち着きを取り戻してきたところであった。教会が抱える問題の背景に、原理主義の問題があると認識し始めた最中の出来事であったため、911アメリカ同時多発テロ事件は、当時の自分にとって衝撃的な出来事であった。「事件の背後にある原理主義の問題を理解するためには、神学を学ぶ必要がある」と考え、働きながら通える夜学の神学校を探して入学した。学びが進むにつれ、聖書を単に字義通りに理解することは自分勝手な聖書解釈に繋がり、究極的には危険思想に行き着く恐れがあること、また、この問題はどの宗教においても、どんな聖典を扱おうとも根源は同じであると理解するに至った。私は、キリスト教だけではなく、同じ問題を抱える他の宗教も学ぶ必要があると考え、神学校卒業後は長年勤めた会社を辞めて英国マンチェスター大学に留学、イスラーム初期の時代に書かれた、8世紀東方シリア教会 (the East Syrian Church) の主教 (Catholicos)、テモテー世 (Timothy I) と、第三代アッバース朝カリフ、マフディー (Al-Mahdi) の神学論議を扱った文献を使って修士論文を執筆し、信仰する宗教の違いを乗り越え、互いに尊重し合うことで相互理解に繋げ、原理主義の問題を克服する可能性を見出していった。

この相互理解の可能性をさらに広げようと、同志社大学大学院神学研究科に進学し、もう一つの一神教のユダヤ教、具体的には、中世のユダヤ学者マイモニデスを研究することに決めた。なぜなら、ユダヤ教は、聖典の観点からはキリスト教に繋がり、法学重視の観点からはイスラームに繋がっているからである。マイモニデスはアリストテレス主義者と呼ばれ、彼の思想の源泉の一つが古代ギリシア哲学にまで遡ること、また、ユダヤの口伝律法「ミシュナー」を法典化した『ミシュネー・トーラー』を彼が執筆し、現代に至るまで彼の思想がユダヤ教とユダヤ思想に影響を及ぼし続けている点も、彼を研究しようと考えた理由である。中世ユダヤの知の巨人、マイモニデスを研究することによって三つの一神教の相互理解に繋がり、さらに古代から現代までのユダヤ思想を勘案することによって、結果的に時代と宗教を超えた相互理解の可能性を追求できると、そう考えたのである。

2. 執筆目的および趣旨

本論文で主に扱った、マイモニデス『迷える者の手引き』(以下、『手引き』とする)は、序章で述べた通り、唯一の弟子であるユダの子ヨセフに宛てて書かれたもので、その意味

で『手引き』が秘伝的と呼ばれることは間違いではない。マイモニデスは「創造の業は自然学であり、戦車の業は形而上学である」と述べ、その上で「自然学を学んだ後でなければ形而上学に達することも、形而上学なしに神の理解に達することもない」と、『手引き』第1部序で論じている。創造の業と戦車の業に関する学びは秘伝とされているが、誰にとっても神を理解するためには物質的世界の学びが必要であり、神の理解に到達するには形而上学の知識が必要という訳である。一方で彼は、「神は我々が完全になり、我々の共同体が行為に関する神の法により向上することを望んでおり、これは第一に、我々の力に応じた神の知解という、知性的信念を得た後でなければ実現しない」とも述べている。ここから、マイモニデスは、各人がその力量に応じて神を理解し、知性的な神理解と律法に則った行為の実践の二つの面において完全になり、結果的にユダヤ人共同体全体が向上することを目指していた、そう断言して良いであろう。

以上から、『手引き』は秘伝的性格を有しつつも、ユダヤ人共同体全体をより良くすることを意識して書かれたもので、従ってマイモニデスの意図とは、愛弟子に秘義的教えを伝授することにあつたというよりも、ユダヤの伝統的な教えと外来の哲学的学びの間に矛盾を覚える人に対し適切な学びの書を提供し、共同体全体を向上させることにあつたと理解され得る。本論文では、哲学的名著『手引き』の他、『ミシュナー註解』「父祖」巻序『八つの章』と、『ミシュナー・トーラー』第1巻「知識」の二つの倫理的著作を相互補完的に読み込むことで、知性的で正しい神理解に至るための彼の秩序観、すなわち、彼の提唱する神への道程を明らかにし、その上で、共同体全体をより良くするために必要な「神を知解すること」と「人間の生き方」がどのように関係するのかを、『手引き』読解の方法論を提示しつつ論じることを目的とした。また、『手引き』の章立てを念頭に置き、「神の本質と属性」、「戒律と人間の自由意志」、「マイモニデスにおける神への道程」の三テーマを、「神の知解と人間の生き方の相関性」という副題に繋げることに注意を払い、論を進めた。

3. 問題意識と研究史

12世紀のユダヤ思想家マイモニデスは、思想史においては哲学者、タルムード註解者、法学者として見なされているが、同時にアイユーブ朝の宮廷医であり、さらに当時のユダヤ人共同体の長として、同胞を政治的かつ社会的にも指導した。このように、思想家として実務者として、多様な分野で能力を発揮し、その上、今に至るまでユダヤ人社会に対して影響力を持ち続けている人物でありながら、日本では彼のユダヤ・アラビア語原典を扱える研究者が極少数しかおらず、和文の参考文献に限られる中で、マイモニデス研究をどのように進めていけば良いのかという問題は、研究初期の段階から難問となっていた。他方、マイモニデスの名著『手引き』に関する和文以外の二次文献は、彼の時代に書かれた註解書から現代に至るまで数えきれないほどあり、二次文献の取捨選択をどうするか、常に悩みの種であった。

研究方法に関して、各研究者の方法論は有益ではあるが、私自身の研究に全面的に応用可能であるとは言えず、また「正しい」、「正しくない」で評価すべき対象でもない。それらの方法論は、それぞれの研究者が格闘して見出した方法論であって、それら研究者の背景が異なっている以上、『手引き』に「決定的な正しい読み方」や「正しい方法論」という

ものはあり得ないと考えた。このため、『手引き』の読解は、各人が独自の読み方を発見するための道程であると捉え、自分なりの方法論を設定した。

マイモニデスの著作は、長年、大衆向き（exoteric）とされる法学書と、秘伝的で難解（esoteric）とされる哲学書の二つに対比されて研究されてきており、秘義を扱う哲学的著作を、より優れたものと見なす風潮が存在してきた。マイモニデスの著作を「大衆向き」と「秘伝的」に分けて論じる手法は、1952年にレオ・シュトラウスが『迫害と執筆技法』で「宗教」と「哲学」の間に横たわる溝について論じて以来、主流の研究方法となってきた。マイモニデスの初期の著作である法学的著作は、より明確で理解し易く、後期に書かれた哲学的著作はより難解であることから、『手引き』を英訳したシュロモ・ピネスは、『ミシュネー・トーラー』は大衆向けの本であり、『手引き』は学習の進んだ上級者向けの本であると評している。一方、著作の連続性を重視する観点から、『手引き』解釈の一手段として、法学書の『ミシュナー註解』や『ミシュネー・トーラー』を用いる動きが、ハートマンやスターンなどの、法学研究を重視する研究者により生じ、ここから派生して、クレイゼルのように政治学的観点から研究を進める研究者も現れた。

以前から、倫理や法の観点を含んだ、主に哲学的に『手引き』を論じた研究書は出版されてきたが、その多くは論文集の形で出版されている。バイスが編集した1988年の論文集には、現在でも度々引用されるピネスやイヴリーの論文が収録されており、また1991年にクレーマーの編集で出された論文集には、法学や歴史学の観点から書かれた論文も多く掲載されている。また、シースキンが編集した『ケンブリッジ・コンパニオン』には、哲学、倫理、法学以外に、聖書解釈の観点から論じた論文も含まれている。

別の潮流として忘れてならないのは、マイモニデスをユダヤ哲学の観点から位置づけ、ユダヤ思想全体を扱った研究書である。主要な研究者としては、中世の主要なユダヤ哲学者について論じたエフロスや、9世紀から15世紀の主要なユダヤ学者を取り上げ、中世ユダヤ思想の全体的流れを描いたシラット、また、ヘレニズム期（前4世紀～前1世紀）のギリシア哲学の影響に始まり、現代までの主要なユダヤ思想家を取り上げたグットマンやリーマン、さらに、中世ユダヤ思想家の主要文献を、註解と共に論集としてまとめたマネキン、そして、イスラーム哲学との関わりにおいてユダヤ思想を論じた井筒俊彦がいる。

特定の学問的観点からマイモニデスを論じた研究者としては、マイモニデスの倫理観に焦点を当てたコーヘンやフォックス、神秘主義の観点から取り上げたケルナー、心理学の切り口から論じたヴァイスらがいる。また、『手引き』における特定の論点に特化して論じた研究者として、マイモニデスの預言論を論じたバカンやクレイゼル、創造論を探求したシースキン、質料形相論をテーマにしたスターンらがいる。『手引き』における聖書の引用に焦点を当て、マイモニデスの聖書解釈に注力したブラ斯拉ヴィーのような具体的で詳細な研究もある。一方、クレーマーやデイヴィッドソン、ハルバータルのように、マイモニデスの生涯と著作を絡めて全体像を描こうとしたスケールの大きな研究や、地中海地域の歴史的な観点からマイモニデスの人物像を描こうとした、シュトロウムサのような研究もある。

最新の研究の潮流としては、これまでの研究手法を総合的に勘案して、マイモニデスの原典を忠実に読み込むことを土台とし、彼の思想を全人的に捉えようとする動きがみられ

る。原典の引用を中心に据え、『手引き』内の主要な論点と合わせて、彼の思想の全体像を浮かび上がらせようとした研究には、古くはグッドマンのものがあるが、最近の研究としては、デイヴィスのように、『手引き』における「創造の業と戦車の業」の解釈を中心に位置づけ、複数の文脈から読み込むことで『手引き』解釈の新たな方向性を打ち出そうとした研究や、デイヴィッドソンのように、マイモニデスの思想に対して影響関係があると見られるギリシア、イスラーム、ユダヤの各思想家との関係を問いつつ、理性主義者マイモニデスという人物像を浮かび上がらせようとした研究もある。このように、マイモニデス研究は、今も新たに多様な研究方法が提示され続けており、今後も時代に応じた必要性和新たな学問的発展に支えられ、進展していくものと期待される。

4. 課題設定と研究方針

研究の主対象である、マイモニデスの主著『手引き』の章立ては、第1部は神の属性に関わる聖書の語彙説明、第2部は創造論と預言論、第3部は戒律と神の摂理を中心テーマにして構成されており、この章立て自体を彼の秩序観の表われとして捉えることもできる。本論文もこの章立てを念頭に置き、副題の「神を知解すること」と「人間の生き方」の相関性に繋げることを目的として、「神の本質と属性」、「戒律と人間の自由意志」、「マイモニデスにおける神への道程」の、三部構成にして論を進めた。

まず本論文では、『手引き』を理解するために必要な知識について、副題の「神を知解すること」の観点から検討した。それらは、第一に、学びの土台である、口伝律法と成文律法を合わせた律法全体の知識と、数学や論理学を基礎としたアリストテレスの自然学の知識であり、第二に、学習を深めるための、法学と法解釈としてのタルムードと、聖書解釈としてのミドラッシュを中心としたユダヤ伝統における知識であり、そして第三に、学習の応用としての、預言と形而上学に関する知識の、三点であると結論づけた。マイモニデスは、神を知性的に理解するためには学びの順序が大切であると、『手引き』結論部第3部51章で強調しており、『手引き』理解のために必要な知識も、段階を踏んで学ぶ必要があると捉えられる。また、副題のもう一方の「人間の生き方」に関しては、彼は『手引き』第3部52章から54章で、神に関する知識の獲得を、いかにして神の行為の属性に倣う行いに結び付け、最終的に人間の完全性、すなわち、人としての「完全な生き方」に繋げていくのかについて論じており、この箇所をどう解釈するのかを、本論文の最重要課題とした。

以上から、前述した点と、最近の研究の潮流として、先人の研究方法を総合的に捉え、マイモニデスの原典を忠実に読み込み、彼の思想を全人的に捉えようとする動きがあることを踏まえ、本研究の副題である「神を知解すること」と「人間の生き方」の二つが相互に働き合うことで、神へと通じる道程が『手引き』において示されている点を明らかにすることを目的に、次の七点を本研究の研究方針とした。

- (1) ヘブライ語とアラビア語の文法的知識に留意しつつ、マイモニデスの原典（基本的にはユダヤ・アラビア語）から読解する。
- (2) 『手引き』を読解の中心に据え、法学書における倫理的著述、特に『ミシュナー註解』「父祖」巻の序である『八つの章』と、『ミシュナー・トーラー』第1巻「知識」の二つに対し、可能な限り言及して論じる。

- (3) 口伝律法と成文律法、アリストテレスの著作とその註釈に特に注意を払う。
- (4) マイモニデスが置かれた状況や社会的背景など、時代背景をできる限り勘案する。
- (5) 『手引き』序にある「矛盾リスト」に注意を払う。すなわち、矛盾の原因が教育上の目的にあるのか、思弁的な目的にあるのか、あるいは前提条件の違いによる曖昧な部分を隠す場合であるのかに留意する。
- (6) 主語が「我々」（すなわち、ユダヤ人共同体）であるのか、「私」（マイモニデスの真意と推察）であるのかに留意する。
- (7) 『手引き』全体の構成に注意を払う。

5. 研究の経緯と論文の構成

前述の研究方針を踏まえ、次の五点を『手引き』読解の要に据えて各章の執筆を進めた。第一に、ユダヤの伝統であるタルムードやミドラッシュなどのラビ文献の引用に留意して、研究を行った（第一章、第四章、第六章、第七章）。二点目に、アリストテレスの自然学的著作に出来る限り注意を払い、研究を進めた（第一章、第二章、第三章、第五章）。三点目に、ユダヤ法学の理解とユダヤ法の知識に留意し（第四章、第五章、第七章）、さらに、マイモニデスの倫理的著作と『手引き』を比較しつつ執筆を進めた（第四章、第五章）。四点目に、ヘブライ語およびアラビア語の文法的知識に留意して、執筆した（第一章、第二章、第三章、第六章）。そして五点目に、『手引き』全体の構成を意識しつつ、研究を行った（第七章）。

論文の構成については、以上の研究の成果を、本論文の主題である「マイモニデスにおける神への道程」と、副題の「神を知解することと人間の生き方との相関性」に結びつけるために、前述の『手引き』における三つの中心的論題である「神の本質と属性」、「戒律と人間の自由意志」、「マイモニデスにおける神への道程」の三テーマを核に据えて論文を構成した。すなわち、神を知ることが、いかにして人間の生き方に結びつくのかを熟考しつつ、三つのテーマに序論を加えて、章立てを行った。

6. 各部と各章の概要および結論

(1) 序論（序章、第一章）

序論では、これまで説明した『手引き』の読解法について検討し、自分なりの方法論を提示した。まず序章では、マイモニデスの研究動向を踏まえつつ、彼の時代の政治的・社会的な背景と、彼の生涯と著作について概観し、中世ユダヤ思想における彼の思想の位置づけと影響関係を概観することにより、本論文の執筆の意義を明らかにした。中世思想の中心的テーマの一つに、理性と啓示の関係性に関する論題があるが、このテーマに最初期に取り組んだ思想家はイスラームの思弁神学者アシュアリーで、アシュアリー派はガザリーを経て、イスラームの正統派神学となっている。一方、クルアーンの合理的解釈を志向するムウタズィラ派の思想は、中世ユダヤ思想にも影響を及ぼした。このイスラームの神学派間においてなされた神学論争、例えば、本論文においても扱っている、神の属性や、神の予定と人間の自由意志に関する論争などが、カラーム（言葉、議論）と呼ばれる、イスラームの思弁神学、あるいは護教論を通して中世ユダヤ思想に流入し、特にムウタズィラ

派神学を通して中世ユダヤ思想に影響を与えた点は、看過できないものと思われる。アラビア語で執筆し、アリストテレス主義者であるマイモニデスが、アラビア語で書かれたアリストテレス註解書、特にファーラービーの註解から影響を受けたのは紛れもない事実である。ガザーリーの思想が、神との合一を目指す、イスラーム神秘思想（スーフィズム）に影響を与えたように、マイモニデスの思想も、神の知的理解や神の摂理を重視し、神を崇拝することで神に近づくことを謳った点で、ユダヤ神秘思想（カバラ）に影響を与えることになった点にも触れておく必要がある。中世イスラームにおいては、哲学と神学は明白に異なる学問であったが、マイモニデスが主知的で人間の理性を中心に据える哲学と、神の啓示を重視して人間と神との関わりに重きを置く神学の、双方の関係性についての議論でキリスト教スコラ学、特にドミニコ会のアルベルトゥス・マグヌスやトマス・アキナスといった、中世のキリスト教思想家に影響を与えた点において、マイモニデスは重要な思想家であると断言できるであろう。

続く第一章では、『手引き』読解の方法論的考察を、『手引き』第2部30章の、彼の「創造の業」解釈に基づいて提示した。マイモニデスの創造論を理解するためには、基本的なユダヤ教の信条に加えて、文法学と自然学の知識、関連する章の読解、さらに基本的な哲学的知識の習得が要求される。なぜなら、マイモニデス自身が述べている通り、『手引き』は組織立った知識に基づいて書かれており、そうした知識がなくては作者の意図を掴むことができず、『手引き』内の秘義的意味は捕捉できないと考えられるからである。次に、彼の創造論の理解に必要な具体的な知識について考察した。第一に、時間的初めを示す *tehillah* と、物事の始源を示す *re'shit* の差異を考察し、世界は時間的順序の初めにではなく、秩序としての始源において創造されたという彼の主張を理解した。第二に、全体と個の両義語の観点から「地」の語に関するマイモニデスの解釈について検討し、創世記1章1節と2節で言及された「地」は、月と地球の間に存在する火、空気、水、土の根源的な四元素全体を指し、一方、10節の「地」は、四元素の内の「土」だけを指しており、このように両義語が用いられた場合は、それが全体と個別のどちらの意味か、文脈によって判別する必要があると理解した。第三に、アリストテレスの自然学に基づく解釈について検討した。彼は創造の業はすべて同時に起こされ、その後、分離して固有の存在になったと論じているが、始原として天と地が共に創造された点を強調している。彼はまた、女性を「質料」、男性を「形相」と捉えており、「質料」である女性は「形相」である男性と常に共にあるために分離し得ずに共存するという、新プラトン主義的な解釈が彼の創造論、特に人間創造に関する基盤的考えであると理解した。第四に、ラビ文献の使用について考察した。彼は創世記の解釈にラビ文献を用い、世界の創造以前に時間が存在したとするラビの言説を否定して、「神は時間的な始まりなく、無から世界を創造した」点を強調する一方で、創世記の水の分離を示す箇所ではラビ文献を肯定し、それは形相に応じた分割を示すと同時に、水 (*mayim*) と天 (*shamayim*) の語の多義性を示していると述べており、ラビ文献の解釈においても自然学と文法学の知識が必要になると理解した。従って、『手引き』全体を理解する場合も、彼の創造論と同様、文法学と自然学の知識、特に、質料と形相の不可分性および同音異義語の多義性の理解が必要であると結論づけられるであろう。

(2) 第一部 (第二章、第三章)

本論の第一部では、三テーマの内の一項目「神の本質と属性」について論じた。まず、第二章では、マイモニデスの属性論の全体を概観した上で、彼がなぜ、どのようにキリスト教とイスラームのカラーム (すなわち、イスラーム思弁神学) における属性論を批判し、その上で、彼自身の属性論を構築していったのかについて考察した。第一に、彼がカラームを批判するのは、彼らの議論が論理性に欠ける点にある。カラームの源は、ギリシア教父が哲学者の教えを反駁するために構築した命題にあるため、彼らの言説が哲学者の見解と矛盾することは容易に推察できる。なぜなら、キリスト教護教学者の方法論を用いたのがムタッカリムーン、すなわち、イスラーム思弁神学者だからである。アリストテレス主義者であるマイモニデスは、彼らの議論の内容ではなく、彼らの方法論を批判したのである。第二に、マイモニデス自身の属性論について、まず、アリストテレスの「論理学」(すなわち、『範疇論』、『命題論』、『分析論前・後書』、『トピカ』、『詭弁論駁論』) に範をとった、彼の「属性の五分類」から考察した。ペロは、カラームの議論が、実体と偶有を論じる存在論や、認識の起源や本質を問う認識論的に論じられる一方、マイモニデスは論理的あるいは文法論的に属性論を論じていると指摘しているが、それはウルフソンが述べるように、アリストテレスの『範疇論』(特に一章の同音異義語に関する部分と、四章の語の十分類に関する著述) にある、論理分析の影響が大きいと推察される。第三に、相反するプラトンの考え方の調停について、主にウルフソンの論文に基づき考察した。これは概念が「神の内にある」とする考え方と、「神の外にある」とする考え方の対立を指す。「神の内にある」とするのは、キリスト教正統派では三位一体、アシュアリー派では神の内的属性、マイモニデスでは行為以外の神の本質となる。他方、「神の外にある」とするのは、キリスト教正統派ではキリストと聖霊、アシュアリー派では神の実体的属性と働きの属性、マイモニデスでは神の行為の属性となる。マイモニデスは「心で表象できない」キリスト教の三位一体は単に名のみ概念で存在し得ないとし、神の実体的属性を肯定するアシュアリー派の教義も、キリスト教と同様に名目的概念であって、本質的属性ではないとした。最後に、アリストテレスの見解と否定神学の矛盾に関して、マイモニデスの属性論の叙述が哲学的見解と否定神学の間で矛盾するように見える点をどう捉えるのかを、カシエルの論文から考察した。カシエルは、レビ記の聖書解釈とファーラービーの論述に基づいて、完全で最高であることも、すべてと異なることも、両者とも比較不能という点では同じであって矛盾しておらず、アリストテレスの見解と否定神学の間にある矛盾は解消可能であるとされた。以上から、マイモニデスの属性論は、カラームの方法論に対する批判から出発し、アリストテレスの論理学を用いて枠組みを構築したものと結論づけた。

続く第三章では、神から発せられた行為における「13 の特性」に焦点を置き、マイモニデスの考える神の本質と属性について、『手引き』第 1 部 53 章と 54 章を中心に、主に神の働きの観点から論じた。マイモニデスの属性論は、第二章で論じたように、イスラーム思弁神学である、カラームに対する批判から発しているが、彼は彼らの属性論の議論の内容ではなく、彼らの属性論が論理的に捉えられていない点を批判している。マイモニデスは、属性論を文法論的に分析することによって、行為者の能力や、時制等の付帯的状态の意味を含まない、動詞の原形である完了形だけが神の属性として適用可能であるとして、神の

行為の属性だけを本質的属性として肯定した。神は物性を伴わず、変化や欠乏の生じない完全な存在であって、いかなる事物とも類比不能な存在であるため、限界のある人間の言葉によっては神の本質を叙述することは不可能であり、付帯的な意味を含まない動詞の原形を用いた神の行為の属性だけを肯定したのである。神の名も、神の本質の表象に近いとはいえ、完全に神の本質を表わし得るものではない。モーセは神に対して、「神の本質と実相について教えて欲しい」と願い出ているが、この二つのモーセの願いに対し、神はまず「神の本質はありのままに把握することは出来ない」と答え、さらに「私はすべて私の善を、あなたの前に通らせる」と答えているが、この後者の神の言葉について、マイモニデスは「神は神の働きを通して神の属性を知らせる」と解釈を施している。本章の結論として、マイモニデスの属性論の意義とは、否定的な神の叙述を通して、人間に神についての理解を促し、神の行為の属性を神の本質的属性とすることによって、人間の行為を徳の行為に繋げることにあったと理解され得よう。

(3) 第二部（第四章、第五章）

第二部では、マイモニデスの法学的著作と『手引き』の間で解釈が異なるとされる、三テーマの二番目の「戒律と人間の自由意志」について論じた。まず第四章では、戒律の論拠づけを廻る問題を、『手引き』第3部27章と『ミシュネー・トーラー』の関連箇所を繋ぎ合わせることで概観し、戒律の究極的目的を探ることによって彼の主張を明らかにした。本章では第一に、すべての戒律に道理はあるのかということ、サーディアとマイモニデスの見解を比較することで考察した。ここから、サーディアが戒律を「理性の法」と「啓示の法」に二分し、判断の土台として「聖典と伝統」を重視して捉えた一方で、マイモニデスは戒律を「法」と「法規」に分け、「法」は道理が明確である一方、「法規」については必ずしも道理が明確ではなく、しかも可変的かつ時限的な法規の存在を想定していることから、二人の見解には類似性と相違点の双方があると理解した。第二に、戒律の有益性と意義について論じ、ここから、マイモニデスの考える戒律の二つの目標とは、第一に、悪行を排し、社会的に有益な徳性を身に着けることで「体の完全さ」に達することであり、第二に、健全な信条と正しい見解を得ることで「魂の完全さ」に達することにあるが、戒律の究極的な目的とは、「体の完全さ」と「魂の完全さ」という、これら二つの完全さを目指して現世をより良く生きること、最終的に後の世に到達することにあると理解した。ただし、この究極的な目的は、法規の改変の問題を大衆から隠すために明らかにされておらず、それは『手引き』と『ミシュネー・トーラー』、また『ミシュナー註解』を相互補完的に解釈することによって初めて捉えられるものと考えられる。以上の考察から、マイモニデスにとって戒律とは、現世をより良く生きるために存在するもので、このため、戒律は全体として道理を持つものと捉え、個別の法規の遵守を目指すよりも、戒律全体が目指すところを知り、神を知ろうと探求し続けるそのあり方にこそ、マイモニデスにとっての究極的な戒律の目的があると結論づけた。

次の第五章では、ユダヤ法の観点から人間の自由意志について論じた『八つの章』と『手引き』とを比較し、『手引き』第3部17章の神の摂理に関する六者（すなわち、無神論者、アリストテレス主義者、アシュアリー派、ムウタズィラ派、ユダヤ教徒、マイモニデス）の

見解と、第3部23章のヨブ記註解におけるマイモニデス自身の見解を概観することにより、議論の枠組みを提示した上で、神の摂理と人間の自由意志に関わる彼自身の見解について、『手引き』第2部48章を中心に考察した。ここでの議論を順にまとめると、第一に『八つの章』と『ミシュネー・トーラー』の記述から、マイモニデスにとっての「自由意志」とは、人が複数の選択肢から自らの意志で特定の行動を選ぶ自由のことを指しており、その選択は自身の知識や経験に基づくもので、そこに神からの特殊な力が介入することはないということが、「自由意志」に関する彼の基本的考え方であると理解した。第二に、神の「摂理」と人間の「自由意志」の関係を、摂理に関する六者の見解とヨブ記解釈から考察した。そこから、「摂理」は自然法則と一致すると捉えられる一方で、それは知性的存在である神からの「神的流出の結果」によって生じているため、知性に結びついた人間の種に属する個だけが知性の結び付き度合いに応じて神の摂理に与るとされ、個々人の状況は、ユダヤの伝統的見解と同様、各人が選択した行動の功罪に応じた結果であると見なすということが、マイモニデスの見解であると理解した。他方、彼はヨブ記註解の中で、摂理の別表現である「天使の介入」について論じており、それは一瞬で、自然の事柄としてしか表されないものの、それは人が理解できるのは月下の事柄だけで、人間の知性では理解し得ないからだとしている。最後に、『手引き』第2部48章の精読から、出来事にはそれを直接引き起こした原因としての行為者があり、その行為の原因の連鎖を突き詰めていくと、最終的には神の意志に辿り着くこと、また、聖書において預言者は出来事の中間的原因を省いて記述するため、出来事の直接的原因が自然的、意志的、偶発的かを問わず、すべての行為が究極的原因である神の意志に帰されるということが、マイモニデスの見解であると理解した。また、弟ダビデの難船での落命を念頭に置いたと思しき箇所から、どれだけ正しく行動しようとも悲劇は生じ、彼自身「すべて神の意志」と受け取らざるを得なかったのだと推察した。結局、どのような状況に置かれようとも、義なる行為を選択し続けることこそが人間のし得る最善だということが、人間の自由意志と神の摂理に関して、マイモニデスが伝えたかったことと言えるであろう。

(4) 第三部（第六章、第七章）

最後の第三部「マイモニデスにおける神への道程」では、本論文の副題である、「神を知性的に理解すること」と「人の生き方」とがどう関わるのかについて考察した。第六章では、マイモニデスが考える、神の知解に至るまでの学びの順序を明らかにした。彼は『手引き』第3部51章の冒頭で、この章の目的を「神に固有な真理を知解した者による崇拜を説明し、人間の究極の目標であるこの崇拜に導き、命の袋に至るまで、この世の住処における神の摂理がいかにあるかを知らせること」であると述べており、51章の言説は「命の袋」、つまり永遠の命に至る間に人間が辿るべき道程と捉えられる。彼は譬え話の解釈から、神との完全な関係に至る過程を七段階に分けて論じており、最後の神に謁見する段階に至るには、神に専心して神に近づく努力をし、知性を強め、神を知解した後には愛を持って神を崇拜し、思考を常に神に向けなければならないと説いている。つまり、人は知性により神を理解した上で愛する対象である神を熱望し、神と結び付くことを一心に求めるべきだというわけである。ただし、神を知解し得たとしても、思いが神と共にない限りは神の

護りを得ることはできず、神の護りを受けるためには思いを常に神に向けて、隔てとなる障害を取り除かなければならないと彼は忠告する。マイモニデスは、神に近付くためには学びの順序があって、最初は学問の基礎となる数学と論理学を、次に可視的な被造物を理解するために自然学を習得し、その上で、不可視な世界を扱う形而上学を習得する必要があると論じる。彼は、聖書やタルムードから引用することによって同胞のユダヤ人読者に訴え、学問の基礎的知識の習得なしに秘儀的知識を学んでいては神に近付くことは出来ないと、「ベン・ゾマはまだ外にいる」というタルムードの言葉を通して、愛弟子と彼の読者に伝えようとしたのであろう。

最後の第七章では、人間の完全性は知解と生き方の何れにあるのかについて、『手引き』結論部の第3部 52章から 54章より論じた。マイモニデスは、人間の完全性は所有、身体、倫理的徳、理性的徳の四つであるが、真の完全性を目指す者は、所有や身体といった物的完全性や、他者との関わりにおける倫理的徳の完全性ではなく、神に関する正しい見解である理性的徳を第一に探求すべきであると述べている。とはいえ、衣食住に困窮した状態では神の知識を求めることは困難であり、また、医師であり法学者でもある彼が、健康や法の遵守の重要性をないがしろにすると考えられず、従って、所有や身体、倫理的徳の完全性の土台の上に、真に神を知ることを探求すべきであるというのが、マイモニデスの主張であると理解できる。一方で、彼はエレミヤ書の引用から、人間の完全性に達するためには、真の学知である神の知解の探求に注力すべきであると主張しつつ、真の人間の完全性とは、神に関する正しい見解である理性的徳を獲得した後に、神の行為の属性である「慈愛、審判、公平」を求め続けるその道程にあると説いている。結局、マイモニデスにとっての真の完全性とは、神を知り、理解するという究極的目標を目指しつつ、理性的徳である神に関する正しい見解を自身の内に生涯をかけて内在化させ、その人の内面から、自ずから神の行為の属性に倣った行いが発せられている状態と言い得ると考える。従って、神を知解することを求めつつ、神に倣った行為を実社会で為し続けることこそが、マイモニデスにとっての神への道程であると結論づけられるであろう。

7. 結び

マイモニデスは原理主義的なイスラーム政権により迫害を受けたためにアンダルスからモロッコに渡り、北アフリカを流転した後、カイロ旧市街のフスタートに定住し、結果的にユダヤ人共同体の長とアイユーブ朝の宮廷医となり、結婚して家庭も築いた。順風満帆に見えた彼の人生は、最愛の弟ダビデが難船で亡くなったことで一転する。これまで精力的に執筆を続けてきた彼は筆を折り、一切書けなくなってしまう。彼は8年もの間、鬱状態に陥ったと、手紙に綴っている。その後、愛弟子とのやり取りを通じて、自分の為すべき使命を見つけたのであろうか、そのやり取りを元に書き上げたのが『手引き』である。

私は『手引き』の結論部分を読み、中国の北宋（960-1127）時代の禅僧、廓庵禅師の「十牛図」を思い浮かべた。「十牛図」とは、僧が悟りを求めてから悟った後までを描いた十枚の絵に詞を付したもので、修行僧がまず書物を通して学び、次に体を張った修行をして、ようやく真理を悟って無になり、ありのままの状態を受け入れた後で、再び俗世間に戻っていく様を描いたものである。この図に描かれた悟りの過程と、マイモニデスが神を知る

ことを一心に求め、真理を悟った後で、その状態を保ったままで生きていくことを説いた結論部の言葉は、見事に重なっているように思える。従って、神を知解することが第一でありつつも、真理を悟った状態を保ちつつ、神に倣った行為を実社会で為し続けることこそが、マイモニデスにとっての神への道程であると結論づけられると言えよう。